

プチポワ独占インタビュー

フルーティスト 神田望美 さん

プロフィール：神奈川県生まれ、ブリュッセル在住
フェリス女学院大学音楽学部卒業ののち、モンス音楽院でフルートを学び、現在コンサート活動をしながらフルートと篠笛を教授している。



父方の祖母がピアノの先生、父も趣味でトランペットなどの楽器を演奏していたという音楽が身近な環境に育ち、小さい時からお祖母さんにピアノを習っていました。子どもの頃から、若者が好きになるポップミュージックより、クラシック音楽を聞く機会が多く、小学校のころ、笛の音色に耳を傾けるようになりました。しかし、先生についてフルートを習い始めたのは、16歳になってからです。音楽大学入学後は、もう後には引けないと猛勉強を始めました。大学2年生の時に篠笛とも出会い、和楽器にも目覚めました。

大学卒業後、ベルギー・モンスでさらにフルートを勉強し、現在に至っています。ブリュッセルに在住してすでに15年が過ぎています。ここベルギーをはじめヨーロッパでは、演奏者のアイデアを生かし、色々なパターンでコンサートを行えます。オーガナイズは大雑把でもちゃんと完成するコンサート作りもなかなか面白いです。これまでに、フランスをはじめ、スペイン、ドイツ、ルクセンブルグ、ノルウェーや中東、日本の地元横浜、東京を中心に関西地方などでコンサートを行ってきました。

フルードと篠笛という、2つの文化から生まれたそれぞれの楽器を使っのコンサートでは、違いをしっかりと考えながらの演奏となります。竹で作られた篠笛は穴が開いているだけで、テクニク的にはフルードのようにはいきません。その分音でイメージを十分引き出せるよ

う努力しています。

和楽器を聞く機会が少なくなってきた近年、和楽器製作者も少なくなりつつあり、海外からの注文も必要という話を聞き、演奏者も邦楽の普及に応援を、とフランスで篠笛を教えています。生徒は、日本が好き、フルードをすでにやっていた、篠笛の音色が好きといった方々です。他の邦楽器同様、5本線で書かれた楽譜の代わりに明治以降に作られた指番号で音の指示が書かれています。篠笛は元来合奏で使われていて、伝統的な古典独奏曲は存在しません。大体ここ100年の間に書かれた篠笛のための曲や、日本の歌などを教えています。

日本では、「東京ブリュッセルトリオ」というグループを組んで、フルード奏者としてコンサートを行なっています。またヨーロッパでもトリオの他にフルード、ハーブ、ヴィオラとのアンサンブル、その他室内楽でのコンサートを行っています。コンサート前は、集中力のためと、消化に酸素を使わないために、食事を早めに取り、コンサートまでに1時間半以上時間を空けるようにしています。唇に刺激を与えないよう、塩からいものや辛いものを避けるようにメニューにも気をつけています。そして、コンサート前には(唾液が出て吹けなくなってしまうので)、必ず歯磨きをして口をすっきりさせて演奏に臨んでいます。日頃の体調管理としては、体を意識していると自然に音も良くなるので、体幹を鍛えるために腹筋などをやり、毎日呼吸法もしています。他に口内炎対策でビタミンB2を取り、

リップクリームを塗って唇を保護する、うがいをしたりして乾燥から喉を守っています。コンサートが終わったら、気分転換に全く違うことをやっています。ベルギーでは、美味しいものを食べたり、お菓子を作ったり、お裁縫をしたりします。日本では、温泉に入ったり、季節によっては桜などの花見をして、心を癒します。

演奏者だけでなく、楽器にも気を使う必要があります。フルードは、指で押さえて音を出す部分に紙が使われています。湿度が高いと、この部分に水分がたまり、音が出なくなります。そのため楽器用の乾燥剤を常に用意しています。反対に、竹でできている篠笛は、乾燥させると良くないので、保湿剤を使うなど注意する必要があります。楽器のリペアも、直す人と感覚が合わないと、希望にかなった修理になりません。リペアマン(修理士)を探すのも最初は大変でした。

9月10日と17日に「モーツァルト・フェスティヴァル」という音楽祭を開催します。夫の両親(音楽家)が始めたもので、22年来続いています。今年は昨年末に亡くなった義父のメモリアルとして第一回が行われた聖ポール教会と聖ピエール教会で行います。世界各国の音楽家が集まり、我々を魅了するクラシック音楽の世界へ導いてくれます。是非、ご家族やお友だちとお出かけください。

詳しい日程、料金などは、下記サイトをご覧ください。

www.festival-mozart.be

www.kandanozomimusic.com